

小さな一歩の大切さを思う

作家 宮下 奈都

生きていく力や、希望というのは、素晴らしく大きなことをやり遂げて初めて得られる華々しいものではなくて、どちらかといえばその反対側の隅っこにあるものなのかもしれない。今回、応募作品を読みながら、コロナ禍で疲弊していた私たちの中に少しずつエネルギーが溜まって、ゆっくりと満たされるイメージが浮かんだ。どの作品にもあたたかさがあり、それが集まってほんのりと体温を上げてくれるかのようにだった。

ひとりではなく、誰かがいる。支えるだけではなく、支え合っている。コロナ禍であってもそれは変わらないどころか、コロナ禍だからこそ見えたつながりもあったのだと思う。応募作からは、ひとりひとりができることを模索しているのが感じられ、また、その過程で新たな可能性が生まれてきているようにも思えた。猫、花、サロン、募金、マスク、ごはん。心強い。こんなにたくさんの人たちが、自分のためだけでなく誰かのために、がんばって、考えて、動いて、これらの作品が書かれたのだということに元気づけられる。暮らしというのは、誰かひとりの偉業によって

成り立つのではなく、たくさん人の人の一歩一歩が集まって前進していくのだとあらためて思わされた。

素晴らしい実践の報告や、よい作品がいくつもあった。

加納桂子さんの作品「マスクのお返しに」は特に心に残る。ささやかな場面が書かれているだけなのに、作者の心の動きにハッとさせられるのだ。介護士である作者は、やさしさと思いやりを「向けられた」と書いているけれど、きっと常日頃からそれを「向けている」人なのだろうと思う。やさしさと思いやりと、迷いやよろこび。さらに介護の仕事の奥深さまで、ひしひしと伝わってきた。福祉とひとことであっても、たくさんの方々の制度の先にいるのは人と人だ。介護をする側と受ける側、その家族も含めた関係には、いくら知識や技術や経験があったとしてもなお逡巡も葛藤もあるだろう。でも、ここにはそれを超えたよいものがあった。短い文章の中にそれが鮮やかに表れていて胸を打たれた。



©Yoshika Horita